

## 山村における作目導入と定着条件

(農試 経営部)

### 1 背景とねらい

山村の農業は耕地が狭いことや市場から遠く商品作目が少ない上に冬期就労できる作目がないことから低就労、低所得な経営構造となっており、これが出稼等の兼業化を助長するとともに過疎をもたらす要因となっている。したがって山村地域農業の課題は小規模で傾斜の多い耕地を有効に活用し経営の集約度を高め所得拡大が可能となる経営構造を創出することである。このため新里村和井内地区を対象に集約作目の導入による農家の経営再編の可能性を検討し、山村における導入可能な集約作目の性格とその定着条件を明らかにしたので指導上の参考に供する。

### 2 技術の内容

#### 1) 峡谷型山村集落における経営の性格と経営改善方向(表-1)

(1) 山村は、たばこと肉牛を基幹とした経営が多いがどの部門も小規模で農業従事者の農業での稼働率は50%程度と推定され、その農業所得は約70万円、兼業所得90万円と少く農業部門の再編による所得拡大が必要になっている。このような中で農業再編に意欲をもつ農家の経営主が40~50才代で夫婦で農業に従事しかつ耕地規模は70~80a以上の農家に多い。また山村の農家は、A後継者が農業に従事する主業型農家、B経営主夫婦だけが農業に従事する複業型農家、C高齢者が担い手となっている複業型農家に区分される。

(2) 経営改善の方向は、農業就業率を高めるため夏期に集約野菜、冬期にしいたけ等の商品作目を導入し経営集約度を高めるとともに周年就労を実現させることを前提とし、家計費は450万円を目標とすること。

#### 2) 導入されるべき作目、品目の組合せと目標とする経営類型(表-2、3)

(1) 導入されるべき作目、品目は、①現在の基幹作目であるたばこより土地生産性の大きいこと(10a30万円以上)。②地場農外雇用労賃(1日6千円)以上の労働生産性をもち、かつ労働1人当り150万円以上の所得を得れる作目、品目の組合せであること。

(2) 以上の目標に即し地域の農家の導入意向等に配慮した導入し得る作目、品目は、ワイ化りんご、生及び乾しいたけ、雨よけほうりんどう、グリーンアスパラガスであり、その作目、品目を導入した経営類型は、Aりんご+ハウス野菜+しいたけ+肉牛、Bしいたけ+ハウス野菜+肉牛、Cハウス野菜+肉牛の3類型となる。

#### 3) 経営類型の定着条件(表-4)

(1) 個々の農家への指導充実を図るとともに農協単位及び集落単位で農家を組織化し、農家相互の意欲向上、相互研鑽を図ること。

(2) 隣接する農協間で作目、品目を統一し出荷ロットの確保に努め産地化を図ること。また予冷施設の利用も農協間の連携により効率的な利用に努めること。

### 3. 指導上の留意事項

1) 新作目導入にあたってはあらかじめ試験栽培を行い技術習得に万全を期すこと。また年次別資金、労働利用計画を策定し経営の転換が円滑にされるよう指導すること。

2) 主業型経営でしいたけを基幹とする場合、約16haの雑木林が必要となる。

4. 参考文献、資料：山村振興における技術開発のための事前評価に関する調査研究 59.3.農試

5. 試験成績

表-1 峡谷型山村集落における経営の性格と経営改善方向

項目 類型	現状の経営								改善方向 上段: 改善方向 下段: 目標達成の手段 (目標達成の手段割合)	
	平均 耕地	平均 農林 面積	農業 従事者	兼業 従事者	主作物目		農業 所得	兼業 所得		夏期 農業 従事率
主業型経営 A	125	2712 人工 26%	主 妻 長男	長男 <sup>△</sup>	たばこ 乾いたけ 水稲	肉牛	121	50	56	経営集約化(農業従事者 向上のための高品 作物導入) 100%
複業型経営 B	112	24 25	主 妻	主 <sup>△</sup> 長男	たばこ 乾いたけ 水稲	肉牛	63	105	53	経営集約化、高齢化 に対応する作物選 択 50%
複業型経営 C	70	20	父 母	主 <sup>△</sup> 長男	水稲	肉牛	25	120	35	老人・婦人労働活用の 作物導入 30%

注 1) 夏期の農業従事率: 4~10月の家族労働保有量に対する農作業低下労働の割合を示す(値定)。  
2) △ 臨時・日雇 ▲ 山林労働

表-2 導入される作物・品目の性格

作物	作物	水稲	生いたけ	乾いたけ	肉牛	備考
主業型経営(A)	◎	◎	◎	○	○	
複業型 経営(B)		○	◎	○	○	
複業型 経営(C)				◎	○	
10a当り所得(千円)	323	462	327	832	331	56
1日当り所得(千円)	20.1	4.9	9.5	5.4	14.4	3.9
備考	戸口2 代付	冬期利用				山林・原野 活用

注 1) たばこの10a当り所得、1日当り所得はそれぞれ299千円、7.8千円である 2) ◎は主要作物、○は補充作物  
3) 10a当り所得、1日当り所得は「新技術行体系」新中沢農業確立計画資料56.6 県農政部  
但し(ほうれん)は「ヤマセ地域農業開発プロジェクト」研究成果概要59.3、県農政部より41作体系  
4) 生いたけ、乾いたけともホタテ場面積で換算している。ホタテ場はムカデ伏(12本/3.3㎡)、ヨロイ伏(30本/3.5㎡)の併用とし、平均21本/3.3㎡とし、利用率を70%としている。生いたけでは有初ホタテ6000本(総ホタテ12000本)で27a、乾いたけでは有初ホタテ20,000本(総ホタテ25000本)で56aが必要である

表-3 目標とする経営類型例

経営類型	現模作物	労働力 従事者	耕地現模		農業 所得 (千円)	作物現模(a. 坪頭)						
			水田 (a)	畑 (a)		夏期労働 水稲	冬期労働 肉牛	肉牛	豚	鶏	養蚕	
A	1人10a ハウス野菜+水稲	2.5	30	70	495	30	44	10		13	8	5
B	1人10a ハウス野菜+肉牛	1.5	30	50	211	30		7		13	1	3
C	1人10a ハウス野菜+肉牛	1.0	30	50	143	30		4	20			3

注 1) 線型計画法による。

表-4 組織の機能と構成員の特徴

組織	農協単位(作物別部会)	集落・地域単位(農協部会支部)
機能	① 経営再編に必要十分な情報・意見の収集 ② 作物の振興方向決定・作物のマーケティング	① 日常の栽培技術支援 ② ムラづくり活動
構成員 の特徴	① 主業型農家の若壮年集落で10%程度の存在 ② 自給率運転が広く広い範囲で自由行動できる。	① 複業型農家の高齢者・婦人集落の多数派 ② 自給率の運転でできる者が少なく、また山村の地形上から行動範囲は狭くなる。